

グローバル化と瞬間的時間の機制

——情報都市論の構築に向けて——

吉 原 直 樹

- 一 クロック・タイムから瞬間的時間へ
- 二 時間—空間の圧縮
- 三 グローバル化とローカル化のパラドクス
- 四 情報都市の出現と両義性
- 五 あらたなパースペクティヴをもとめて

「イメージの風が加速する世界にあり、ますます場を失いつつある。私たちは誰なのか、そして私たちはどの空間／場所に属しているのか。私は世界市民なのか、国民なのか、土地の人なのか。サイバー・スペースのヴァーチャルな存在でいられるのか……。」
(Harvey 1996・246)

一 クロック・タイムから瞬間的時間へ

インターネットに代表される新たなコミュニケーション・メディアの普及にともなって、新たな時間と空間が

生み出されている。こうした新しいテクノロジーはヒト、情報、イメージの移動の機会とその制約条件をドラマティックにつくり変えている。そして移動性にはすべて時間性、空間性が鋭くからみあい、新たな時間、空間のメタファーが力をもつようになってきているのである。考えてみれば、ついこの間までクロック・タイムがモダンの社会の構造と社会的実践の構成の中心にあると見なされてきた。すでに拙著（吉原 二〇〇二）で詳しくみてきたように、モダンの社会では長い間、時間と空間を空にして、抽象的で分割可能な、いかなる場合にも測定可能な時間を発達させることが中心になる、と考えられてきた。すなわち「その自然源から抽象された時間、つまり、独立し、脱文脈化し、合理化された時間」であり、「均質な空間的単位にほぼ無限に分類でき……そして時間そのものとして位置づけられる時間」であるとアダムが指摘するようなクロック・タイムがモダンの社会を厚く覆っていたのである（Adam 1995・27）。

ちなみに、クロック・タイムの発展が大都市生活にたいして基底的な意義を有することを最初に指摘した社会学者は、筆者が知るかぎり、ジンメルであった。彼はいわゆる「大都市」論文において、大都市での社会生活と経済活動が壮大な計画設計と精度があつてはじめて可能になると述べている。大都市での生活はぐくむ関係や出来事はきわめて複雑にからみあつており、最高度の厳格さを備えた契約や事業がなければ、すべての構造はたちまちのうちに崩壊しかねないのである（ジンメル 一九七六）。フリスビイらは、ジンメルのこうした議論に依拠しながら、大都市での生活は、社会活動を時間基準で安定した非人格的な時間表へと統合することを通して、かろうじて見通せるようになると指摘している（Prisby and Featherstone 1997）。

他方、ルフェーヴルは、クロック・タイムの全社会的な支配が生きられるカイロスの時間、つまり時計が何時を示しているも、「いま」こそが重要であるというような場合の時間観念をことごとく追放してしまった、と述べている。彼がいうには、プレモダン社会では、生きられる時間が樹木の幹状に空間へと刻み込まれ、あたかも

年輪のように成長の痕跡がしるされる。それにたいして、モダンの社会では時間は都市へと呑み込まれ、生きられる時間が闇に没する、つまりもっぱら計測の手段と化し、生きられる時間が社会によって抹殺されるのである（ルフェーヴル 二〇〇〇）。

ところが、後述する「時間—空間の圧縮（time-space compression）」と深く関わっている新しいテクノロジの台頭と引き換えに、かつてベルクソンが指摘したような、「空間化された時間」とは区別された私たちの「持続（duree）」の経験⁽¹⁾は「瞬間的」あるいは「ヴァーチャル」なかたちで再秩序化され、それとともにクロック・タイムは社会の後景にしりぞきつつあるように見える。ちなみに、こうして立ちあらわれる瞬間的で超時的な時間を、アーリは「瞬間的時間（instantaneous time）」ととらえ、その構成要素を次のように概括している（Urry 2000・126）。

「第一に、完全に人間の意識を超えてしまう、想像も及ばない短い瞬間を基底とする、情報と通信の新たなテクノロジー。第二に、別々の瞬間に起こる原因と結果という時間的分離を特徴とするクロック・タイムの線形的論理に代わる、社会的、技術的関係の同時的存在性。第三に、文字通りに瞬間的、同時的でないにしても、ひどく短期的、断片的な時間のもつ広範にわたる重要性のメタファー。」

「儂さ、使い捨て、一過性、イメージ、シミュラークルといったものの典型的事例」（アーリ 二〇〇三・二九五）を与えているこうした「瞬間的時間」のもとで、未来が現在へと溶解しており、テレビがはるか遠くの慄きを抱かざるをえないようなできごとを人びとの日常生活に送り込んでいるのである。こころみに、二〇〇三年三月二〇日にはじまった、誰がみても「造反無理」（最上俊樹）なイラク戦争にたいしてテレビはといえば、「戦争についてつながりのない情報のコラーージュを日常生活に持ち込み……ほとんど瞬時に人びとは一つの惨事から別の惨事へと、なすすべもなく『運ばれている』」（Urry 2000・127）にすぎなかった。ともあれ、いま断片的な話の

寄せ集めが地理的な脈絡とは無関係に社会生活に入り込み、社会生活そのものを形成するなかで、クロック・タイムが部分的に「瞬間的時間」にとつて代わられるという事態が生じているのである。

二 時間—空間の圧縮

(1) 空間的回避／固定化

ところで、「光速で世界中を駆けめぐる、重さのないビット」(Negroponte 1995・23) が中心となっている上述のような「瞬間的時間」によつて、ハーヴェイが指摘する「時間—空間の圧縮」が広範囲に立ちあらわれるとともに、その新たな様式が取りざたされている。ハーヴェイによれば、「時間—空間の圧縮」にはそれに特有の「空間的回避／固定化 (spatial fix)」を伴っている。ハーヴェイは資本主義が時代ごとにそれぞれ異なった「空間的回避／固定化」を引き起こしていると指摘した上で、それを資本主義の幕開けにおいては、空間は生産力の拡大、労働力の再生産、利潤の最大化を促すような方法で編成され、時間—空間の再編成を通じて、資本主義は危機の時期を乗り越え、新たな資本の蓄積期と時間を通して空間と自然のさらなる変換の時期に向けて基礎を築くと説明する。そして「世界がわれわれに向かって内側へと崩れかかってくるように見えるほど空間的障壁を克服しながら、生活のペースを加速化する」過程として「時間—空間の圧縮」が描かれる(ハーヴェイ 一九九九・三〇八)。ところがフォーディズムからポスト・フォーディズムのフレキシブルな蓄積への移行とともに、以下のような、あらたな「空間的回避／固定化」と時間と空間の表象の形態があらわれるという(ハーヴェイ 同上)。

「われわれが自分たち自身に世界を表象する仕方を変えざるをえない……。空間は電子通信の『地球村』、経済的

また生態学的に相互依存した『宇宙船地球号』へと収縮しているようである。……存在するのは現在ばかりという点にまで時間的地平が縮められるにつれ、われわれの空間的、時間的な諸世界が『圧縮』しているという圧倒的な感覚に対して、いかにわれわれは対処するかを学ばなければならなくなるのである。」

ちなみに、アーリは、そこにおける「時間―空間の圧縮」の内容を次のようにまとめている（アーリ 二〇〇三・四〇）。

「生産における回転時間の加速化、流行の交替や移ろいやすきの加速傾向、製品のほぼ全域での入手可能性、製品、関係、契約の即座性の増大、短期収益主義の高まりと『待ち時間の文化』の退潮、社会生活における広告業と急変するメディア・イメージの重要性、つまりいわゆる『煽動の文化』、建造物や物理的景観を含むシミュレーション技術の利用可能性の増大、一〇億分の一秒の速度で瞬時に空間を飛び越える新しい情報・通信技術のめざましい普及……。」

詳しく述べるまでもなく、このようなあらたな局面における「時間―空間の圧縮」には、先にふれた「瞬間的時間」の作用が深くおよんでいる。ちなみに、そうした「時間―空間の圧縮」によってもたらされた方向性喪失と断片化がポストモダンティイの条件をなすとしたハーヴェイの定式化（ハーヴェイ 一九九九）、さらにそれ（「時間―空間の圧縮」を「物理的距離」の圧縮とともに、すぐれて「美学的距離」の圧縮——いわば即時性、インパクト、センセーション、同時性の強化——を示す「資本主義の文化的矛盾」として先駆的にとらえたベルの定式化の試み（ベル 一九七六―七七）は、いまや周知のものになっている。考えてみるに、それらは一九世紀から二〇世紀にかけて近代西欧の美学において永続的なモチーフをなしたものの衣鉢を継ぐものである（Gregory 2000・84）。あらためてその点とかかわって興味深いのは、ハイデッガーは一九五〇年時点ですでにこうした「時間―空間の圧縮」の事態を予見していた、というジンマーマンの指摘である。彼によれば、ハイデッガーはこの段階で時間と空間の距離の収縮、ラジオ速報の重要性、テレビによる遠隔性の克服、つまるところ人と事物

の「無距離化」について述べていたというのだ (Zimmerman 1990)。

(2) 社会的な分化／差異化

さてこのようにみていくと、「時間—空間の圧縮」というのは、空間を横断する移動やコミュニケーションを指す術語である。これは(ギデンズによって時間—空間の遠隔化として言及された)社会的諸関係の地理的な拡張、ならびにそのすべてに関わるわたしたちの経験を意味する現象でもある。(マッシー 二〇〇二・三四)とするマッシーの指摘は簡にして要をえていることがわかる。その上であらためて気づかされるのは、「時間—空間の圧縮」の論としての基調がきわめて一方向的なトーンで貫かれているという点である。ハーヴェイの議論は、自らあきらかにしているように、商品生産と資本蓄積の法則によってうながされた「時間による空間の絶滅」への衝動(追及)とマルクスが見なしたものに深く足を下ろしている。つまり、「資本の動きによって不可抗力的に決定され」(マッシー 二〇〇二・三四)、「社会生活に一貫性をあたえるハビトゥスを転位させるような方向に向けられ」……つまるどころ『アイデンティティの危機』に導くような『予感』、『ショック』、『崩壊感覚』、『恐怖』へと誘う (Gregory 2000・334) という論調になっているのである。⁽²⁾

もともと、「時間—空間の圧縮」にともなう多くの空間的境界の崩壊は、いわばナショナル、ローカルといったスケールによって示される「地理の終わり」(グレゴリー)をもたらしはしたが、空間の意義をことごとく低減させたわけではない。「空間的障壁が重要でなくなるにつれ、空間内における場所のバリエーションにたいして資本はより敏感になるとともに、資本を引きつけるように場所の差異をつくりだそうという誘因が高まる」(ハーヴェイ 一九九九・三八〇—三八一)という指摘にあるように、現実には場所間競争の高まり＝場所性の強化が見られる。しかしそれも結局のところ、資本蓄積と貨幣循環の論理に規定されており、「時間—空間の圧縮」の

現局面を不安をかきたてるものとする解釈と結ぶつくことよって、場所が受動的に位置づけられることになるのである。すなわち、「存在するのは現在ばかりという点にまで時間的地平が縮められるにつれ、われわれの空間的、時間的な諸世界が『圧縮』しているという圧倒的な感覚」に対処するために、場所が「安定性やならん問題のないアイデンティティのよりどころ」(マッシー 二〇〇二・三八)として提示されるのである。なるほど、資本の力が「時間―空間の圧縮」の構造的次元をなしていることは疑いえないし、その脈絡で場所にささやかな平和をもとめ、やすらぎを得ようとしているという論を組み立てることには、さほど異論をはさむ余地はないのかもしれない。しかしそれにしても、こうした論調においては「時間―空間の圧縮」が社会的な分化／差異化ともなつて表出しているということが貶価されているか、あるいはそうでなければ、あまりにも無造作に取り扱われているといわざるをえない。

ちなみに、マッシーが『「時間―空間の圧縮」の権力幾何学』の例としてとりあげる、われわれの日常生活の一つの風景となつている、以下のような移動性とコミュニケーションにかかわる権力の布置構成とある種の空間的封じ込めは、この分化／差異化の文脈で理解するとわかりやすい(マッシー 二〇〇二・三七)。

「だが車が自動車を使うということは、その個人の移動性を増大させるとともに、社会的合理性と公共交通システムの財源を縮減させてもいる。つまり、公共交通システムに依存している人びとの移動性を潜在的に縮減させているのだ。町の外れにあるショッピング・センターに自動車で出かけるたびにあなたは、コーナー・ショップの商店の商品価格の上昇に、そればかりかその店の閉鎖を早めることにさえ寄与するのである。第一世界社会の毎日の快適な生活の生産・再生産に掛かり合う『時間―空間の圧縮』——第一世界社会の人びとの旅ばかりでなく、その生活を支えるために世界中から集まる資源——は、必然的に環境に影響をおよぼし、あるいはその限界にぶつかることになり、結果として、第一世界社会は自分たちの生活よりも先にそれ以外の社会の人びとの生活を制限することになる。」

なお序でにいえば、この権力幾何学から表出してくるのは、ベックのいうブーメラン効果という概念がホール流にいえば、批判的であることを意図しているにもかかわらず、「ヘゲモニーの神聖化」と共謀関係にあるという点である（ホール 二〇〇二・一一七）⁽³⁾。

三 グローバル化とローカル化のパラドクス

(1) 脅し文句としてのグローバル化

ところで、情報と通信のテクノロジがナノ秒の速さで瞬時に空間を飛び越え、意思決定の時間的地平が劇的に狭まるなかで、あらためてグローバル化のあり様に熱いまなざしが向けられるようになっていく。それは上述した「時間－空間の圧縮」のいわば立ち位置を示すようなものとしてあるが、問題は「時間－空間の圧縮」に関する議論がそうであるように、グローバル化に関する議論もまた「資本主義による世界の構造化」（ホール）とローカルなもの断片化／溶解といった大きな語りに収斂する傾向にあることである⁽⁴⁾。こうした傾向は、「近代世界を特徴づけてきた均質化と差異化の過程が、これまでの境界を越えて浸透し、国民国家という領域性が崩壊あるいは変型しつつある状況」（伊豫谷 一九九八・二三八）、換言するなら「近代の世界システムをつくり上げていく諸国家と諸社会のあいだで見られる多様なリンクエージと相互連関が拡がり、深化するプロセス」（McGrew 1992・23）としてのグローバル化を、いわば一つの単体として擬人化されている資本のダイナミクスに引き寄せて論じる視角から立ちあらわれていると考えられる。興味深いのは、そうした状況あるいはプロセスを「驚異と感じてきた人々が新しいナショナルな枠組みを求めて先鋭化してきている」（同上・二三三）という現実の動きと呼応するかのように、モーリス・スズキがいみじくも「脅し文句」というような、以下のような議論

が広範囲に立ちあらわれていることである（モリス＝スズキ 二〇〇二・二二五）。

「歴史的に前例がみられないほど資本、商品、人、思想が移動するようになり、それが国家主権を空虚なものにし、市民たちから重要な集合的行為のためのフォーラムを奪いつづけている……」

こうした「脅し文句」は、レチナーとポリーのいう「グローバル化の意味のインフレ」、すなわち「政府の役人は自分たちの国の経済的な苦悩をグローバル化の攻撃のせいにし、ビジネス・リーダーたちは自分たちの会社の縮小をグローバル化に備えるために不可欠であるとし、環境主義者たちは歯止めのないグローバル化の破壊的な影響を嘆いているし、地元民を擁護している人々は小さな文化の消滅の恐れを慈悲なきグローバル化のせいにする」（Lechner and Boli 2000・1）といった状況となつてあらわれているし、またグローバル化は容赦ないものであり、事実上止めることはできない、したがって抵抗するよりは受け入れるしかないといった「ネオリベラル的なスタンス」（Gregory 2000・315）の台頭も招いている。

いずれにせよ、以上のような論調のもとでは、モリス＝スズキが批判的に論評する、「地球規模での資本の移動は職の安定的確保^{セキユリテイ}を掘り崩し、科学技術の変化は蓄えられた知識の価値を低め、多種多様で豊かな地域の伝統は、伸展するヘコカ・コーラ資本による植民地化（coca-colonization）の波によつて忘却される。そして政治的無力化はアノミー、文化的アイデンティティの喪失、恐怖として経験される」（モリス＝スズキ 二〇〇二・二二五―二二六）といった議論が支配的なものになり、つまるところローカル（化）はグローバル化の一方的な規定にさらされるといふことになる。そしてそうであればこそ、こうした議論から「ローカルを『アイデンティティに縛られた場』とか『審美化された空間性の反動的な政治』といった過去にもどる場と見なす」（Smith 2001・12。但し、傍点は引用者）ような、ある種のコミュニタリアン的なアクションが派生することになる。

ちなみに、このような文脈であらためて注目されるのは、マッシーが「進歩的な場所感覚」として引例するハ

イデガーに由来する場所概念である。マッシーによれば、それは「一つは、場所には単一の本質的アイデンティティがあるとする観念。もう一つは、『ドゥームズデー・ブック』にのっている名称を解釈することで、内面化された起源を求めて過去を掘り下げ、それに基づいて内面化された歴史から場所のアイデンティティ——場所感覚——が構築されるとする観念」、さらに「場所のまわりに線を引くこと」を特徴としている(マッシー 二〇〇二・三九)。マッシーはこうした場所概念を『生成』としての《時間》という進歩的な次元からの転換(同上・三八)として位置づけている。それがスミスが指摘するようなグローバルとローカルの二項対立図式(ディコトミー)、すなわち『『グローバルなもの』をトップダウンの政治経済的権力が跳梁する空間と見なし、他方、『ローカルなもの』を階級的分極化の場もしくはグローバルな資本主義の容赦ない行進にたいする無力な文化的抵抗の場に還元していく』(Smith 2001・12) 立場のうえにあるか否かはさておき、「時間—空間の圧縮」の理解において、場所が「安定性やなんら問題のないアイデンティティのよりどころ」として措定される既述した理論動向と響きあっていることはたしかである。

(2) 場所の立ち位置

さて資本がグローバルに展開する現代社会は、「ヴァーチャルな存在が人々を規律化する世界」(伊豫谷 一九九八・二四一)でもある。そうした点で、グローバル化は何にもましてヴァーチャルであり、非物質的なもの(象徴的なもの)の跳梁をうながすが、それは非物質的なものが世界を一樣に塗りつづす同質化(homogenization)のプロセス(↓文化的帝国主義の強制)と同義なのではない。アパデュライやレチナーらが指摘するように、グローバル化は「歴史性、不均等性、ローカル性を帯びている」し、文化の同質化と異質化(heterogenization)とのせめぎあい也不可避である(アパデュライ 二〇〇二・五、一; Lechner and Boli 2000・2-3)。そつて

この点に鋭意に着目するなら、グローバル化を擬人化された資本のリストラクチャリングという大きな物語に収斂させるような先に触れた「脅し文句」とは違って、むしろグローバル化という修辭にふくまれる以下のような「約束」の内容に視線を向ける立場の方がより重要になるし、リアリティを有するようになるといえよう（モリス・スズキ 二〇〇二・二二六）。

「境界を越える文化の流れは一方で国民体を掘り崩すかもしれないが、他方で同時に、多重多層の別様のアイデンティティを活性化し、伝承された市民のありかたに、潜在的により大きな流動性を導き入れる……。ネイティブなものとなるものとのあいだの境界が透過しやすくなるにつれて、周縁部ではディアポラス¹離散という境遇が特別なものではなくなり、『国家と市場主義システムの外部にある、国家―国民を横断する連携』によって構成される新たな『公共圏』の形成が促進される……。」

ここではいみじくもホールが述べているように、「『ディアスポラ的』と呼ぶものの枝の繁る樹木のように横断的な諸関係が、中心―周縁関係を補充しつつどのようにして同時に転位するのか、またグローバルなものと同様な問題構造となる。そしてそれをめぐって、マッシーが（先に一瞥した「進歩的な場所感覚」を向うにおいて）²「場所のオルタナティブな解釈」と呼ぶものが構成されることになる（マッシー 二〇〇二・四一）。それはひとこととていえば、社会的諸関係と理解のネットワークが根莖状に³節⁴合され、しかも外に向かって開かれている状況を念頭に置いてなされる、以下のような場所解釈である（同上・四一）。

「この解釈では、ある場所にその種別性を付与するのは、ずっと過去にさかのぼって内面化される歴史ではない。それは、ある特定の位置で一まとめに節合された諸関係の特定の布置から構築されるという事実なのである。そのような社会的諸関係、そして移動とコミュニケーションのあらゆるネットワークを思い浮かべながら、人工衛星から地球に向か

って移動しているとすれば、それぞれの場所はそのネットワークが交差する、特定の、つまり唯一の点とみなすことができるだろう。換言すれば、場所の唯一性、つまりローカリティは、社会的諸関係、社会プロセス、そして経験と理解がともに現前する状況のなかで、その特定の相互作用と相互の節合から構築される。」

いずれにせよ、こうした解釈においては、人びとの「生きられた世界」への、まるでわが家にもどるときのような帰属感(アット・ホーム・ネス)や原生的なアイデンティティを強調する論に色濃くみられる「場所のまわりに線を引く」傾向はほとんど見られないか、後景にしりぞいている。もちろん、こうした解釈からするなら、イヤエルが着目する世界のマクドナルド化と土着(indigenous)の欲望や恐怖とが混在した状況(Yyer 1988)は、平に立ちかえって再検討し、基本的に同質化のプロセスに回収されていかない、ヘグローバルなものとの相互浸透の地への差延)、ヘローカルなものとのグローバルな展開)の方向においてその立ち位置をたしかめてみる必要があるだろう。このことはいま世界のあちこち、とりわけアジア諸国で先鋭化のきざしをみせている、グローバル化とナショナルリズムの相克という状況を前にして、伊豫谷が「ナショナルな存在への批判とグローバル化への対抗の双方を同時に行いうる場をいかに設定することが可能なのか」(伊豫谷 一九九八・二三五)とする課題設定と深くむすびついている。

四 情報都市の出現と両義性

(1) モダンの都市／国家のなかの都市

今日、資本は地球上のもっとも周縁の部分にまで到達するとともに、「生きられた世界」の、身体を含む内的

空間を属領化している。この資本の、内と外に向かう二重の拡大はグローバル化を通底するものであり、そのうえに、あらゆる生活の相互作用、相互連関、相互依存の度合いがますます強まるグローバルな秩序形成がみられる。またそれとともに、人びとはといえ、世界のそれぞれの場所がとどめているもの、物語りうるものにより敏感になっている。そしてアリーのいう「場所の差異化への誘因」(Urry 2000・125)が、移動資本のみならず、移民、観光客、亡命希望者の感覚においても高まっている。さてそうしたなかで、都市が単なる容器にとどまらず、多様なリンケージとヴェクトルが蝟集／集積する空間としてますます重要性をおびている。それはラッシュユとアリーに従うなら、みてきたようなグローバルとローカルのパラドクスのなかにあつて、情報とコミュニケーションの濃密なネットワークがさまざまにゆきかう「管理され飼いならされた地帯」ということになる(Lash and Urry 1987)。

考えてみれば、都市は長い間、近代の国民国家のなかで自らの存在を位置づけ確認してきた。ところで、この近代の国民国家は一つの国民経済内で完結する労働力編成の上に、そののさまざまな対立要因を一つの〈中央〉に回収し、「画一と集積」の運動に解消してきた。そこで重要な役割を果たしたのがクロック・タイムとフオーディズムの機制である。そしてこの国民国家の内部で国民共同体という〈幻想〉がはぐくまれ、社会のさまざまな差別化や序列化の動きが「市民社会の国民化」(斎藤日出治)へと統合されていったのである。この市民社会の国民化への統合において重要な位置を占めたのが「市民的公共圏」(V中間的領域集団)である。都市社会学では、モダンの都市をこうした市民的公共圏の上に「統合機関」(矢崎武夫)とか「結節機関」(鈴木栄太郎)として位置づけるといふ伝統をはぐくんできた(吉原 二〇〇二・八四)。いずれにせよ、モダンの都市は基本的に産業都市であり、「国家のなかの都市」であつた。

しかし、モダンの都市は「画一と集積」の論理に裏うちされた国民社会の要でありながら、基層のところでは

統的な公共空間の衰微を伴いながら、個人の抽象化がすすみ、安定し固定したアイデンティティをもちえない都市の主体を生み出した。ちなみに、ジンメルは先にとりあげた「大都市」論文において、クロック・タイムの支配とともに、断片化され原子化された抽象的個人が叢生されるプロセスを精彩ある筆致でえがいている(ジンメル 一九七六)。

(2) 情報都市／国家を包摂する都市の台頭

近代世界を特徴づけてきた均質化と差異化の過程が極限まですすみ、「国民国家の『脱国民化』」(ジェソップ)が加速することによって、都市が「場所の空間(space of place)」から「フローの空間(space of flow)」へと変容を遂げている。カステルは、この変容を次のように述べている(Castells 1989・6)。

「社会を支配する組織の論理がインフォーメーション・テクノロジーの強力な仲立ちを経て文化的アイデンティティや地方社会の有する社会的拘束から脱するとともに、歴史的に構造化された場所の空間を支配する『フローの空間』が立ちあらわれる……。」

ともあれ、ヒト、モノ、情報が単に集積する場から、そういったもののフローを節合し管理する場へと転態をなし遂げた《情報都市》が跳梁している。そこでは「時間－空間の圧縮」が反転してあらわれる、ギデンスがいうところの「時間と空間の脱埋め込み(disembeddedness)」が細部にまですすみ、人間の経験と自然のリズムから完全に切り離された「コンピュータ・タイム」(リフキン)、「ここでいう『瞬間的時間』が深く浸透している。そしてそのように勃興する情報都市の空気の波動のなかで、都市の主体がいつそう抽象化・空虚化し、「人々の活動を組織化し構造化する集合性の劣化」(Urry 2000・128)が避け得ないものとなる。

こうして情報都市には「瞬間的時間」の機制がすみずみまでゆきわたり、つまるところ、それは資本の時間か

らの解放／離脱と文化の時計からの逃避をうながす、需要ネットワーク装置のスペクトル空間へと化するのである。使用価値から完全に離床したモノ（商品）、しかも世界のあちこちの大昔から超未来にわたって、そうしたもののショーウィンドウとなつて博覧会都市は、まさに情報都市の極致であり、さまざまな電子メディア・ネットワークによつて時間と空間、さらにその方向さえもが規定される一種の記号論都市↓表象空間としての性格をあらわにしている。そこから描出される以下のような事態もまた、フロツピー・ディスクを介して自在に交換できるプログラムのようなものとして情報都市が存在すればこそ、理解可能になるのである（吉原 二〇〇二・八六）。

「ここではボーダレスなりアルタイムの交信が可能となる。がその一方で、脱コンテクスチュアルで自己言及的な電子メディアの作用を介し、かつての市民的公共圏を厚く覆つていたような親密な人間関係がごとく破壊され、諸個人は個人化の闇のなかに沈んでいく。こうして都市に身を置く人々は、他者とのコミュニケーションを構築することなしに、大量の情報と知識を内臓した一連の情報通信ルールに依存することによって自らのアイデンティティを形成することになっていく。そして規格化はされているが、それ自体、たえず解体され、脱中心化され、そして拡散される意識と身体をもつ主体ができあがる。」

重要なことは、個人からかつてあつた〈集合性〉を剝奪するこうした情報都市が、産業都市がクロック・タイムのメタファーであつたように、「瞬間的時間」のメタファーとしてあるという点である。

ところで情報都市は、新しいテクノロジ（メディア・テクノロジ）がもたらした「時間－空間の圧縮」によつて、私たちが即時的かつ極限的な世界を生きているという感覚（「グローバルな現在」¹⁴）を生きているという意識）を高揚させ、結果的に自らが「国家を包摂する都市」として社会の前景に立ちあらわれるのをうながす。それは東京に即していうと、「帝都」↓「首都」を通して自らの体内に埋め込んできた国民国家のアイデンティティの

物語から脱しきれないでいた「世界都市」ではなく、「空と電子の多重的なネットワークによって媒介されたフロアの空間の創出によって、都市そのものが脱コンテクスト化し超空間化する一方で、距離や領域的な拡がりが一時的に解消されていく世界性」(吉原 二〇〇二・二五九)をもつポスト世界都市である。⁽⁶⁾

(3) 情報都市の逆流

さて以上のような情報都市のもつ基調を確認したうえで、あらためて問題となるのは、情報都市が現に得体の知れないフュージョン現象をみせはじめているという点である。情報都市では、インフォメーション・テクノロジー(以下、ITと略称)が人々の生活世界の全域を覆う。そしてITが、人々が自己自身にかかわる媒体としての性格を強めればこそ、主体が既述したような脱コンテクスチュアルな状況に置かれる、つまり日常生活のある特定の場や集団から離脱するのをうながす可能性をはらむことになる。したがって情報都市では、文字に加えて音声や画像の伝達を介して、もともと五感に宿っていて人びとが気づかないでいる他者と交感する能力をたかめる可能性をはらんでいるといわれるマルチメディア等の働きによって、従来の支配的な参照枠組(家族、地域、階級等)から個人を解放するといった積極面をもっている。ちなみに、CMC (computer mediated communication) をこの脈絡で論じると、その可能性の一端が浮かびあがってくる。

しかしよく考えてみると、こうした主体の脱コンテクスチュアルな状況は、同時にアタリがいうパノプティコン化の基層にも足をおろしている。アタリはITがすみずみまで浸透している情報都市を、ミクロ権力を内包した「自己監視財」として叙述し、社会的規範を個人に内面化させるように作用する、ITの「自己規律と監視のテクノロジー」の性格に警鐘を鳴らしている(Attari 1990)。ITが跳梁する都市のパノプティコン化を危惧するこうした議論は、かつて隆盛をきわめた現代社会論の系に奇妙にも位置づく。また、シンメルの既述したよう

な「大都市」論の基底にみられる大衆社会論的な論調とも響きあっている。

情報都市のもつこうした両義性は、今日、情報都市がデュアル・シティとなつてわれわれの前に姿を見せている点により象徴的にあらわれている。情報都市の構造的次元が他ならぬ産業構造の情報化にあることはいうまでもないが、いまや、それに伴つて雇用面での不平等が拡がり、少数の熟練・専門技術者がハイテク製造業・先端サービス関連業部門に従事し、圧倒的多数のものが低熟練・底賃金職種に就くといった二極化傾向が加速し、それが建造環境 (built environment) に写影されてデュアル・シティとなつて立ちあらわれていることについてはよく知られている。とはいえ、そこに見出される分水嶺 (social divide) は多次元化し、複数の空間的スケールにおよんでいる。したがつてデュアル・シティが、社会の階層的秩序が地域構造に直接影をおとすモダンの都市にみられた空間的凝離 (spatial segregation) から出自している——^{プロトタイプ}かりにエンゲルスのみたエキスボ空間とイースト・エンド空間、ゾーボーのみたゴールド・コーストとスラムを原型として——としても、そうしたものの単なる究極態ではないのだ。むしろ、デュアル・シティの地下へとこうした空間的凝離が〈逆流〉しているのである。繰り返すまでもないが、こうした逆流は先にみたグローバル化とローカル化とのパラドクスの文脈で透視すると、前者が後者を席捲する場面では可視的であるが、ひるがえつて後者が前者へと反転する場面では不可視的なものへと変わる。

いずれにせよ、このようにみていくと、情報都市は既述した「時間—空間の圧縮」のもつダイナミズムを最大集約的に示すとともに、「資本主義の開かれた矛盾」(ルフェーヴル)を黙示するものとなつているのである。そしてそうであればこそ、上述したような情報都市の両義性を見定める視点としての、ポジがネガに転化し、ネガがポジに再転化するといった議論の限界はあきらかである。それは基本的には近代主義的な二分法の枠内にある。したがつてグローバル化を推進している力がグローバル化にたいする歯止めとなるような力をつくりだしている。

という認識は重要であるとしても、そうした認識を上記の二分法から解き放つためにも、別様のパースペクティブが必要なのである。本稿で述べてきたこととの関連でいえば、何よりもとめられているのは、グローバル化の布置構成 (constellation) が「根本的にフラクタル的であって、ユークリッド的な境界や構造や規則性をもはや備えていない」(アパデュライ 二〇〇二・二七) こと、そしてそれゆえ「瞬間的で超時的な時間」の機制に深く浸潤されていることをあきらかにすることのできるような多項的な説明である。このことは結局のところ、情報都市への視線の複数性をどのように確立し、再構成していくのかという、それ自体領域横断的なものとしての課題に収斂する。

そこで最後に、そうした課題を説き明かすに際して示唆に富むと考えられるいくつかの理論地平を、むすびに代える形で示すことにしよう。

五 あらたなパースペクティブをもとめて

以上、述べてきたところからも明らかのように、グローバル化とローカル化というコンテクストにおいて果たす電子メディアの役割は、資本の作用に取り込まれながらも、それが瞬時に人びとの日常生活に埋め込まれ／編みこまれることによって、人びとの「生きられた世界」を非有機的なものにすると同時に、そうしたものが根茎と絡みあった蔓、あるいは生い茂った雑草のような形で立ちあがるのを助ける。ちなみに、アーリはこうしたメディアのもつ構造化された動態をベースに据えて、逍遙し、境界を再審するグローバルな波動とそこから類推的に導き出すことのできる情報都市を分析するために、ゾーハーとマーシャルのいう以下のような「量子的社会」という概念を援用している (Urry 2000・122)。

「量子的実在は……潜在的には、粒子のようでも波動のようでもある。粒子は単一体であり、空間と時間に位置づけられ測定可能なもので、ある時点でどこかに存在する。粒子はあつちにもこつちにも、あの時、この時にも存在する。波動は『非局所的』で、空間と時間を超えて拡がり、その瞬時的な作用は至るところに及ぶ。波動もまた同時にあらゆる方向に拡がり、他の波動と重合し一体となり、あらたな実在（あらたな創発的な全体）を形成する」

この援用は、ケリーにならって、ネットワークの「複雑なもの混沌とした力を引き出す」機能、さらに「真に多様な要素が多数集まって一貫性」が保持されるのをうながす（ネットワークの）組織構成の特性を視野に入れていることであるが（Kelly 1995・25-26）、空間的コノテーションを随伴してあらわれるそうしたものが移動と時間の理解にとつて基底的なメタファーとなっていることはたしかである。

しかしいうまでもなく、そこに潜んでいる構想力は、抽象的で幾何学的な諸関係に還元されるだけでは輝きをはなさない。それは、われわれはまきれもなく空間のなかで生き行動しているのだということを感じさせる方向へと転成を遂げてはじめて、きらめきを発するのである。それゆえ、「この転成がいまどう立ちあらわれつつあるかを見極めることは、一人の人間の思いを超えて空間に底在する力を照らし出す努力へとむすびつく可能性を秘めている。しかしその努力は、容易に〈土俗〉とかそれに共鳴するイリュージョンに反転する可能性を内包している。」（吉原 二〇〇二・一―二）。実はここに、場所を定式化することの意義とむすびつきが横たわっているのである。ちなみに場所論については、まず重要なのは、グローバルとローカルについての二項対立的なアジェンダ設定の裡にひそむ近代主義的偏向^{バイアス}をあきらかにし、その上で、「脅し文句としてのグローバル化」の延長線上に何らかの安定性やアイデンティティのよりどころとして場所をもとめるといったスタンスにたいして、はっきりと拒否の構えをとることである。そしてこうした構えに立って、基本的には「場所は境界線のある領域としてではなく、社会的諸関係と理解のネットワークにおいて節合された契機として想像できる」（マッシ

一 二〇〇二・四一」という認識がもとめられるのである。

とはいえ、こうした認識はそれだけで実態的な議論へと発展していくわけではない。いわばグローバル・イッシュューとローカル・イッシュューが相補的に向き合う「生きられた世界」において、上述の認識と実態的な議論とを媒介する論理を見出す必要がある。そこで有力な理論地平を構成するのがローカル・ガヴァンス論である。中央装置や命令体系が存在しないワールド・ワイド・ウェブ(WWW)が縦横に行き交う情報都市では「諸要素・制度・システムが互いに自律性を有しながら、相互牽制や調整を繰り返しつつ、相互の無理解を縮減するプロセスをはぐくむ」(吉原 二〇〇二・一〇九)可能性があるゆえに、そうした情報都市を《社会的実験室》にして、多様なステイク・ホルダー間の対立・妥協・連携からなる重層的な制度編成^{II}ガヴァンスが出現し得るのである。いうまでもなく、こうしたガヴァンス論の基層をなしているのは、「瞬間的時間」がもつ、差延へとたえず移動する差異、そして凝集と散種を繰り返すフラクタルな構造である。

ともあれこうしてみると、「瞬間的時間」の機制が脈動する情報都市を、年代記的な時間に支配され、結局のところ国家の〈威〉を正統化するしかない大きな語り^{ナラティブ}にはもはや還帰させることはできない。瞬間のエピソードをつむぎながら、そうしたものを節合しながら見えてくる理論地平を、グローバル化とローカル化のあいだで揺れ動く人びとの息づかいに耳を傾けながら、そしてそうした人びとが相互に交錯しながら織り成す「意味の網の目」(ルフェーヴル/モーリス・スズキ)に熱いまなざしを注ぎながら、ひろげていくしかない。われわれはいま、「生きられた世界」がきらめきを増すのか、あるいはなだれを打って滅びていくのかを、自らそこに足を下ろして見さだめようとしている。まさに情報都市はわれわれに大きな試練を与えている。

(一) 前にもみたように、ヘルクソンは「時間 (temps)」を「持続」から区別し、それを量的で空間単位に分割可能

なもの、すなわち「空間化された時間」とみなしている。それは彼によれば、真の時間ではない。「持続」こそが本来の時間なのである（ベルクソン 一九九〇、一九九五）。

(2) こうした論調にたいするもつとも充実した批判が、同じグレゴリーによって以下のようになされている（Gregory 2000・835）。

『時間—空間の圧縮』のメタファーは、『抽象的空間』による『生きられた空間』の属領化にともなう社会過程と社会的実践から目をそらした。空間の絶滅を誘った技術は同時に、もう一つの社会空間の生産にもかかわっている。

(3) ベックのいうブーメラン効果は、先進社会の財が「意図せざる結果」としてもたらしたリスクが、先進社会そのものを自己否定するというものであるが（ベック 一九九八）、そこにはポスト・コロニアルにおいてなお存在する「植民する者」と「植民される者」とのあいだが曖昧にされてしまうという惧れがある。

(4) もちろん、グローバル化に関する議論は百花繚乱である。ちなみに、ヘルドらは影響の側面に限定して、議論の流れを以下の三つに分類している（Held et al. 1999・10）。

① 超世界論

「新しい局面」グローバルの時代。「主要な特徴」グローバル資本主義、グローバル・ガバナンス、世界市民社会。「ナショナルな政府権力」衰退もしくは崩壊。「グローバル化の推進力」資本主義とテクノロジー。「階層化のパターン」古いヒエラルキーの崩壊。「支配的モチーフ」「マクドナルド化」「マドンナ化」等。「概念」人間行動概念の再導入。「総括」国民国家の終焉。

② 懐疑論

「新しい局面」貿易ブロック化、地球統治の後退。「主要な特徴」一八九〇年代よりも世界の相互依存が縮小。「ナショナルな政府権力」強化。「グローバル化の推進力」政府および市場。「階層化のパターン」南の周縁化の進展。「支配的モチーフ」国家的利害。「概念」国際化と地域化（regionalization）。「歴史的軌道」地域的ブロック化／文明の衝突。「総括」政府の黙認と支援に依存する国際化。

③ 変化論

「新しい局面」歴史的に類をみないグローバルな相互連結。「主要な特徴」「厚い」グローバル化。「ナショナルな政府権力」再構成。「グローバル化の推進力」モダニティの諸力の連合。「階層化のパターン」世界秩序の新しい編成。「支配的モチーフ」政治的共同社会の変容。「概念」地域間の関係や離れた個人の再整序。「歴史的軌道」不確定・グローバルな統合と分断化。「総括」政府権力や世界政治を変えているグローバル化。

(5) 国際金融取引においてみられるマネーゲームは、「カジノ資本主義」(ケインズ)を想起させるに十分であるが、それはまさにグローバル化が随伴する経済的バーチャル化の典型例である。

(6) ポスト世界都市は年代記的にみれば、まきれもなくアフター世界都市としてあるが、同時にそのチームには、一連の世界都市パラダイムでは語りつくせないようなもの、いうなればそうしたものを超える意味が込められている。

(7) もともと情報都市については、都市問題論かテクノロジ決定論の文脈で論じられるというのが一般的であった。少なくとも社会学では、ポジカネガのいずれかに収斂する現代社会論の系でおさえられがちであった。

(8) この場合、背後仮説として複雑性の理論の影響が指摘できるが、それがどのように取り込まれているかについては説明を要する。しかしここで詳述する余裕がないので、さしあたり Urry (2000・120-121) を参照されたい。

文献

- Adam, B. 1995 *Timewatch*, Polity.
- Appadurai, A. 1996 *Modernity at Large*, University of Minnesota Press, chap. 2 (門田健一訳 [二〇〇二]) 『グローバル文化経済における乖離構造と差異』『思想』九(三三)
- Attali, J. 1990 *Lignes d'horizon*, Fayard.
- Beck, U. 1986 *Risikogesellschaft Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Shirkamp (東廉・伊藤美登里訳 [一九九八]) 『危険社会―新しい近代への道』法政大学出版社
- Bell, D. 1976 *The Cultural Conditions of Capitalism*, Basic (林雄二郎訳 [一九七六-七七]) 『資本主義の文化的矛盾』講談社)
- Bergson, H. 1889 *Essai sur les donnees immediates de la conscience*, Felix Alcan (平井啓之訳 [一九九〇]) 『時間

- と自由』白水社)
- , 1939 *Matière et mémoire, essai sur la relation du corps a l'esprit*, Presses universitaires de France (岡部聰夫訳〔一九九五〕『物質と記憶』駿河台出版社)
- Castells, M. 1989 *The Informational City*, Blackwell.
- Frisby, D. and Featherstone, M. 1997 *Simmel on Culture*, Sage.
- Gregory, D. 2000 "Time-space compression," Gregory, D. et al. (eds.), *The Dictionary of Human Geography*, Blackwell.
- Harvey, D. 1989 *The Condition of Postmodernity*, Blackwell (吉原直樹監訳〔一九九九〕『ポストモダニティの条件』青木書店)
- , 1996 *Hybrids of Modernity*, Routledge.
- Hall, S. 1993 "When was the 'post-colonial'?" in Chambers, I. and Curti L. (eds.) *The Post-colonial Question, Common Skies, Divided Horizons*, Routledge (小笠原博毅訳〔二〇〇二〕『ポスト・コロニアル』とねごうだのたのか?』『思想』九三三)
- Held, D. et al. 1999 *Global Transformations: Politics, economics and cultures*, Polity.
- 伊豫谷登士翁 一九九八「グローバルリゼーションとナショナリズムの相克」伊豫谷ほか編『グローバルリゼーションのなかのアジア：カルチュラル・スタディーズの現在』未来社。
- Iyer, P. 1988 *Video Night in Kathmandu*, Knopf.
- Kelly, K. 1995 *Out of Control: the rise of neo-biological civilization*, Addison-wesley.
- Lash, S. and J. Urry 1987 *The End of Organized Capitalism*, University of Wisconsin Press.
- Lechner, F. J. and J. Boli 2000 "General introduction," in F. J. Lechner and J. Boli(eds.), *The Globalization Reader*, Blackwell.
- Lefebvre, H. 1991 *The Production of Space*, Blackwell (斉藤日出治訳〔二〇〇〇〕『空間の生産』青木書店)
- McGrew, A. G. 1992 "Conceptualizing global politics," in A. G. McGrew and P. G. Lewis(eds.), *Global Politics*:

Globalization and the nation-state, Polity.

- Massey, D. 1993 "Power-Geometry and a progressive sense of place," in Bird, J. et al. (eds.) *Mapping the Futures: Local cultures, global change*, Routledge (加藤政洋訳 [二〇〇二]) 「グローバル化と地理学的想像力」『思想』九三三三)
- M-Suzuki, T. 2000 "For and against NGOs: The politics of the lived world," *New Left Review*, Mar/Apr 2000 (大川正彦 [二〇〇二]) 「NGOのたまたまのイエスとノー」『思想』九三三三)
- Neroponte, N. 1995 *Being Digital*, Alfred A. Knopf.
- Simmel, G. 1971 "The metropolis and mental life," in D. Levine(ed.), *On Individuality and Social Forms*, University of Chicago Press (居安正訳 [一九七六]) 「大都市と精神生活」『シムメル著作集』第二二卷 (白水社)
- Smith, P. 2001 *Transnational Urbanism*, Blackwell.
- Urry, J. 1995 *Consuming Places*, Routledge (吉原直樹・大澤善信監訳 [二〇〇三]) 『場所を消費する』(法政大学出版局)
- , 2000 *Sociology beyond Societies*, Routledge.
- 吉原直樹 二〇〇二『都市とモダニティの理論』東京大学出版会。
- Zimmerman, M. 1990 *Heidegger's Confrontation with Modernity*, Indiana University Press.